曽根遺跡なぜ諏訪湖底に？

町民大学 小口さん講演

下諏訪　下諏訪町公民館は10日、今年度第5回目の町民大学を下諏訪総合文化センターで開催した。諏訪湖博物館専門研究員の小口徹さんが「曽根遺跡はなぜ諏訪湖底にあるのか」と題して講演し、約60人が聴講。日本考古学の黎明期に新聞紙上で議論された曽根遺跡の性格を現代の科学の知見から解説した。

諏訪市の間欠泉センターから北浜源湯までの沖合300㍍、水面下2㍍にある曽根遺跡は、1907年に旧高島小学校の教員、橋本福松が発見。多くの石鏃と剥片が見つかり、縄文時代草創期（1万3000年前）の遺跡として注目を集めた。

明治から大正期に、新聞紙上で、なぜ湖底にあるのか論争が勃発。坪井正五郎、鳥居龍蔵、田中阿歌麿が水上で生活していたなどとする説を展開。一方で神保小虎、保科五無斎は、もともとは陸上にあったと主張した。

坪井の死により結論が出ないまま下火になった論争に関心を寄せていた藤森栄一や戸沢充則が立木の根を引き上げ、遺跡は陸上にあったと判明するも、理由は不明のままとなった。

小口さんは冷涼多雨期に河口の泥が堰としてたまって湖の水位が高くなったり、温暖期には低くなったりする現象を手掛かりに、諏訪湖の水位は最低738㍍から最高765㍍だったと推測。その上で、温暖だった縄文時代に曽根遺跡は千本木川沿いにあり、「およそ2000年前にごろまでには水没したと考えられる」と語った。

曽根遺跡がなぜ諏訪湖底にあるか説明する小口さん